

方形周溝墓観察の一視点(1)

大屋 道則

はじめに

筆者は1990年度下半期に、坂戸市入西地区に所在する中耕遺跡の方形周溝墓群発掘調査に関してその最終段階に携わった。そしてこの発掘調査の中で、方形周溝墓に関して幾らかの事を考える機会を得た。入西地区の方形周溝墓群は既にその一部が『広面遺跡』として報告されているので、今回ここで問題点の幾つかを整理し、方形周溝墓観察の一視点としてみたい。

方形周溝墓は日本考古学が対象とする様々な遺構の中でも、比較的近年になってから取り扱いが始められたものである。そして今日の方形周溝墓の研究は、その遺存形態の単純さと発掘調査自体の定型化とが相俟って、非常に遅延した状況にある。即ち方形周溝墓研究の歩んで来た道は物理的構造の十分な復元へとは向かわずに、方形周溝墓が初めて発見された当時の世相を大きく反映し、徒に社会構成史的な研究が行われ続けて来たものであると言えよう。たしかに方形周溝墓に関して今までに形態論的な視点に立った研究が全く行われなかった訳ではない。しかし当初から物理的な構造を復元する為の努力が十分に為されない今まで今日に至っていることは、間違いのない事実である。現在、研究対象としての方形周溝墓は、遺跡（遺構）形成論的な分析が最も必要とされているものであるといえよう。

又、現在、発掘調査が広く社会的に認知され、記録保存をも含めた上で埋蔵文化財の保護が周知徹底化されて行く反面、発掘調査の作業化・形骸化も異常な勢いで進んでいる。遺跡（遺構）形成論的な調査研究の必要性が明らかであり、その前提となる諸条件（広域的な且つ長期にわたる発掘調査、高度な自然科学分析、訓練されたスタッフ、高性能な機器）がこれほどまでに整備されていながら、依然として十分な成果をあげる事が出来ていない。個々の発掘調査のあり方について再考の余地があるのかもしれない。

以下では前述した点に鑑み入西地区での発掘調査の所見及び報文の記載に基づいて、方形周溝墓の物理的な形態、祭祀の形態の二点に重心をおいて、方形周溝墓研究の視点を数回にわたって検討して見る事にしよう（注1）。

第1章 周溝墓の形状

先ず本章では方形周溝墓の物理的な形態についてその一部を検討して見る事にしよう。方形周溝墓は一般的に、方台部とこれを巡る溝、そして方台部や溝の中に認められる埋葬施設とによって構成されている。関東の周溝墓では主体部或いは墳丘が遺存していない事が一般的なので、発掘調査の現場で観察の中心となるのは専ら周溝である。

1節 周溝の平面的・立面的形態

一定の形態を持つ（=定型的な、或いは形態論的にくくられた）遺構の型式は、通時的には系統の中で、共時的には系統圏の中で支持されるべきものである。これは、普通に行われている土器の

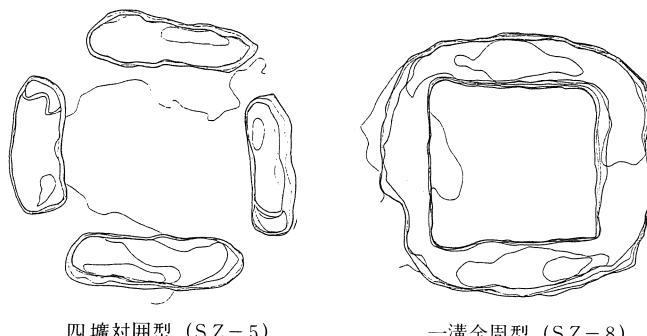
編年論的把握と同様である。

遺構の分析に於いても遺物の分析と同様に対象への接近法が必要であり、その根幹的な部分は当然ながら分布論や型式論である。又、遺構の取り扱いの場合には特に型式論の前提としての形態論も重要である。ただ形態論的取り扱いで注意しなければならないのは、現在まで残されている遺構の形態は、合目的的な用途を持って機能していた当時のそれとは大きく異なっている点である。それは旧表土が遺存していない事、つまり遺構の上部の欠落が一般的である事からも明瞭に理解される。この様な遺構の考古学的な取り扱いに於いては、型式論的な操作を保証するものが形態論的相同意であり、この形態論的相同意成立の主要な要因が各部位の機能・用途の相同意であり、そして、その変化の要因が場の機能・用途の変化とこれに関わる意識の変化であると考えられる故に、遺構の型式は最終的には機能・用途の中で論じられなければならない事が明白である。相同な部位の対比を基本とした遺構の型式論的操作を推し進めて行く事が、既に述べた様に方形周溝墓研究では從来十分には行われて来なかった。ここでは様々な類型の集合として考えられる入西地区の方形周溝墓群について、既報告の広面遺跡を基にしてその型式論的取り扱いの前提としての形態論的分離を行って見る事にしよう。

尚、この様な入西地区という地域の中での形態論的・型式論的な操作は、一定地域の中での特定遺構を対象としたものであって、それ故に型式論的な取り扱いの一方の保証とも言える、巨視的な意味での分布論的同一性については問題ないと考えられる。

●周溝の平面形態の二大別

方形周溝墓の平面形態は、土壙四基を一組として方台部が四角く区画されるものと、全周する溝



第1図 方形周溝墓の平面形態の二大別

捉える事が可能であろう。又、これら二者は更に幾つかの具体的な系統に細別される可能性を持っている。

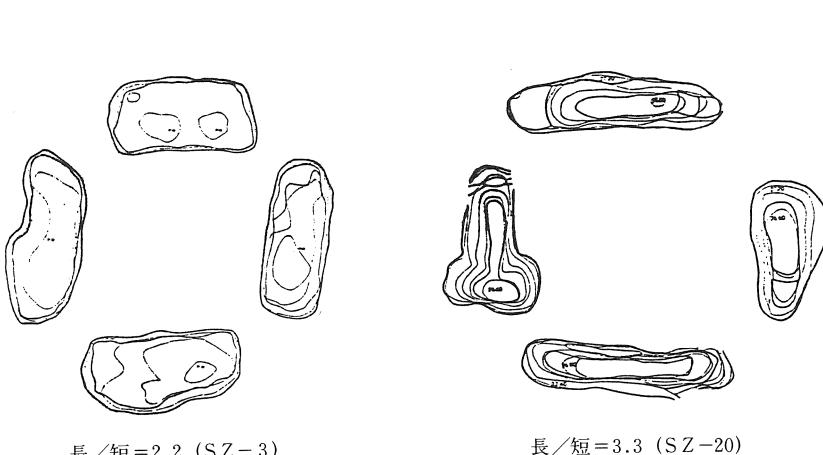
従来の一般的な認識では、方形周溝墓の形態の時期的な特徴の一つとして、四墳対囲型は古い様相であり、一溝全周型は新しい様相であると見做されてきた。この様な一般論を入西地区の方形周溝墓群にただちに当てはめて考える事は手続上好ましくない。形態分類から変遷について言及するのであれば、機能・用途の中で相同意を論じ、これを前提とした型式論が展開されねばならない。形態的差異が認められる二者が同一系統内時間差の関係なのか、異系統の並存関係にあるのか或い

で方台部が囲い込まれるもの
の二者に大別する事が出来る
(第1図)。これは広面遺跡に
於いても同様である。ここで
は前者を四墳対囲型と呼び、
後者を一溝全周型と仮称して
おく事にする。広面遺跡の周
溝墓の中にはその他の形態
を持つものも存在するが、原則
としてこの二者の変異の中で

は異系統の交替にあたるのかさえも不明瞭なままで行われる想定に大きな意義を見い出す事は出来ない。形態論から型式論へと言った正規の手続きが必要である。四壙対囲型と一溝全周型の周溝墓について、取りあえず方形周溝墓の二大別である事を確認し、前者から後者と言った単純な判断を一時停止した上で、具体的な操作をすべきであろう。

● 四壙対囲型の土壌形態細別

ここで四壙対囲型の周溝墓を構成する各土壙（注2）の形態に注目して見よう。

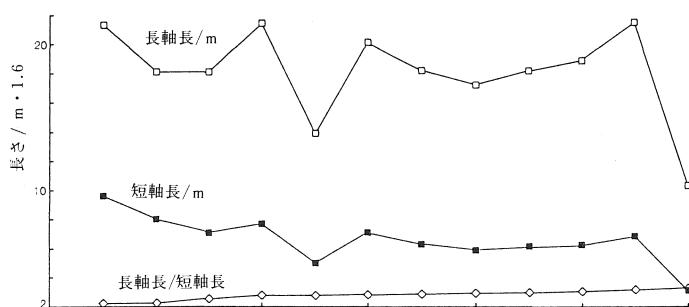


第2図 四墻対開型の土壌の形状

四壙対囲型の周溝墓は、その名称が表すように四基の土壙とこれに囲まれた方台部及び主体部とによって構成されている。明確な主体部が検出されず、又、方台部が希にし

か遺存していない状況下にあっては、周溝の形態はその組み合わさり方と共に、方形周溝墓の型式論的な取り扱いにふさわしいものである。そして後述するように周溝の形態変遷は、ネガティブに方台部の形態変遷を示すものであると言える。周溝の形態から型式論的取り扱いを行うための前提として、ここでは定量的な取り扱いを行って見よう。

今、広面遺跡の四墳対開型の周溝墓を構成する土壙について見てみると、各々の土壙が比較的丸



第3図 四擴対開型の土壙の形状（正面遺跡）

みを帶び、土壌の長軸と短軸の長さの比率が2.2に近いもの（椿円形土壌）から、各々の土壌が比較的長方形に近く長軸と短軸の長さの比率が3.3に近いもの（長方形土壌）までを大凡の範囲として、この中で様々な比率のものを認めることが出来る（第2図・表1）。

注3)。これをグラフにしたものが第3図である。このグラフを見てみると、四墳対団型の周溝墓を構成する各土壙の長辺長と短辺長の平均値の比率が特定の値に極在する事無く、2.2から3.3の間での漸移的な分布となっている事が理解されよう。

表1 広面遺跡四壙対囲型周溝墓の土壤形態

遺構 番号	単軸長／m・1.6					長軸長／m・1.6					長軸／ 単軸	方台部幅／m・1.6			方台部 ／溝・2
	東	西	南	北	平均	東	西	南	北	平均		東西	南北	平均	
3	2.1	2.4	2.7	2.4	2.4	5.2	5.7	5.4	5.1	5.3	2.2	6.1	5.9	6.0	1.3
5	1.5	1.8	1.8	1.7	1.7	4.8	4.7	6.1	5.9	5.4	3.2	6.4	5.8	6.1	1.8
6	2.1	2.0	1.4	1.6	1.8	4.9	5.4	5.0	4.8	5.0	2.8	6.2	5.8	6.0	1.7
10	1.6	1.7	1.3	1.6	1.6	4.0	4.4	5.2	5.3	4.7	3.0	6.0	5.3	5.7	1.8
11	1.6	1.8	1.8	1.9	1.8	4.6	4.4	4.4	4.7	4.5	2.5	5.0	5.5	5.3	1.5
13	2.2	2.4	1.7	1.7	2.0	5.2	4.5	3.7	4.7	4.5	2.3	5.3	5.7	5.5	1.4
14	2.2	1.9	1.9	1.7	1.9	6.2	5.7	4.8	4.7	5.4	2.8	5.6	6.3	6.0	1.5
15	1.6	1.4	1.4	1.7	1.5	4.3	5.0	3.8	5.1	4.6	3.0	5.7	5.5	5.6	1.8
17	1.4	1.3	1.3	1.0	1.3	3.2	3.4	3.7	3.6	3.5	2.8	4.6	4.0	4.3	1.7
18	1.6	1.2	1.8	1.3	1.5	4.5	4.8	4.1	3.8	4.3	2.9	4.6	4.8	4.7	1.6
19	1.6	1.6	1.5	1.6	1.6	3.6	3.6	5.4	5.6	4.6	2.9	5.5	4.4	5.0	1.6
20	0.9	0.8	0.7	0.7	0.78	2.0	2.1	3.1	3.1	2.6	3.3	3.5	3.1	3.3	2.1

●四壙対囲型の土壤の形態が機能に及ぼす影響

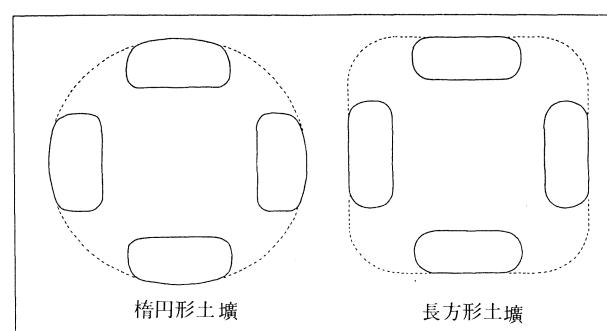
この土壤の形態の差異からどの様な事が想定可能であろうか。ここでは土壤形態の差異を、方形周溝墓の機能の差異に結びつけて考えてみよう。土壤形態の差異は方形周溝墓の機能・用途、即ち景観や祭祀の諸形態にどの様に結びつくのかを明らかにしておきたい。

先ず第一に、土壤形態の差異は掘削土量の差異となる。長軸長が同じ値を取るとき（即ち同程度の規模の周溝墓の場合）、楕円形土壤は長方形土壤に比して平面積が大きく、楕円形土壤と長方形土壤を同じ深さに掘り下げるとするならば楕円形土壤は掘削体積も必然的に大きくなり、その結果掘削土量が長方形土壤と比した時に著しく多くなる。

第二に、この様な掘削土量の差はそれによって築かれるであろう方台部の形状を規定する。小量

の土砂を用いて築かれる方台部は平板な構造をもたらし、多量の土砂を用いて築かれる方台部は起伏に富んだ墳丘形態をとり得る可能性を示していると言えよう。

第三に方台部の形状の差異は相即的に墓としての周溝墓の景観の差異であり、周溝墓を構成する各場所の觀念的な意味、或いは祭祀の具体的形態さえも規定するものとなるであ



第4図 周溝墓を構成する土壤の形態と外見

ろう。

第四にこれと関連して、楕円形土壙四基で構成される周溝墓の土壙によって示される外郭線は円形に近く、長方形土壙四基で構成される周溝墓のそれは文字どおり方形に近いものとなる。これも前者と同様な理由から周溝墓の景観を規定し、祭祀を規定する可能性を持つものである。

以上の事が、周溝の形態の差異から機能・用途の差異へと言及する手懸りである。即ち、入

表2 土壙の形状と周溝墓の景観

	楕円形土壙	長方形土壙
方台部形状	相対的に高い	相対的に低い
周溝墓外郭線	円形に近い	方形に近い

西地区方形周溝墓群に認められた平面形態の二大別の一つである四壙対囲型については、各周溝墓を構成する土壙の形態に関して、楕円形土壙～長方形土壙と言った漸移的な平面形態の差異を見い出す事が出来、これが墳丘形態や周溝墓外周形態と言った墓としての周溝墓の景観の差異となり、更に各場所の観念的な意味や具体的な祭祀形態の差異となる可能性を考え得ると言う事である。

●具体的な墳丘形態

既に述べたように墳丘の形態については、楕円形土壙では土壙の部分が占める平面積が方台部に比べてかなり大きく、長方形土壙では土壙の占める平面積が方台部に比べて前者ほど大きくはない。従って、周溝が同様な深さをもっている場合には楕円形土壙に於いては大量の土壙掘削土を狭い方台部に高く積み上げている事が想定され、長方形土壙では方台部に掘削土をさほど多く積み上げていない事が予想されよう。

ここで方台部の形態の傾向を想定すると、前者では大量の土砂が積み上げられた紡錘型、四角錐、或いは高い台形が考えられ、後者では緩やかな高まり或いは比較的低い台形が考えられる事となる。

●墳丘形態の変遷

ここで話を進める為に、四壙対囲型の方形周溝墓に認められる楕円形土壙と長方形土壙が同一の系統のものであると言う前提に立脚し、前者から後者へと言う変遷を仮定して見よう。

もしも四壙対囲型の方形周溝墓を構成する土壙の形態が楕円形から長方形に変遷するならば、先に述べた様に周溝墓自体の外形と墳丘の形態もそれに伴って大きく変化していると考えられる。先ず外形については楕円形土壙を持つものは周溝墓の見かけの外形、即ち各土壙の外側の辺が描く線をつなぐと円形を呈している。長方形土壙を持つものは同様に考えると四角形を示している事は先に指摘した通りである。後者は名実共に方形周溝墓であり、前者は外郭線では円形周溝墓的な形態

となるのであり、前者から後者へと周溝墓の景観の経時的な形態変遷が考えられるのである。

表3 入西地区広面遺跡に於ける方形周溝墓の形態変遷

	土壙形態	墳丘高	墳丘形	外郭線
古い様相	楕円形土壙	高い	紡錘・四角錐・高い台形	円形
新しい様相	長方形土壙	低い	緩やかな高まり・低い台形	方形

2節 周溝覆土観察の基礎的視点

方形周溝墓の構造研究には、周溝覆土の検討による遺構（遺跡）形成論的な視点からの分析も有

効である。

方形周溝墓の周溝覆土の土層の成因と成分を論理的に考えるならば、A：周溝の上端から黒色の表土が流入しこれによって形成された土層（旧表土流入土層）、B：周溝の近くに位置する地上施設の崩壊に伴う流入土層（崩壊逆流入土層）、C：周溝の上端の立ち上がり部分の崩壊による流入土層（肩部崩壊流入土層）、D：人為的な埋め戻しにより形成された土層（埋め戻し土層）等が想定される。周溝の覆土から検出される具体的な土層がこれらのどれにあたるかの判別は、地山の土層が表土、旧表土、ローム、礫等といった様に上層から下層にかけて明瞭に分層可能で、且つ、それぞれがかなり異なった性状の場合には比較的容易である。しかし入西地区の方形周溝墓群の中でも既報告の広面遺跡に関しては、地山が全般的に灰黒色を呈しており、周溝墓の覆土も又灰黒色の粘土層から成っているので、その報文中の土層所見からでは各土層の起源、ひいては先に分類した四項目の何れに実体の想定が可能であるものなのかの弁別が困難である。この点に付いては、地山がローム質土層及び礫によって構成され、この上に黒色土層が堆積している標準的な状態の場所が最適であり、入西地区方形周溝墓群の中でも中耕遺跡がこれに該当する可能性をもつて、中耕遺跡の報文刊行後詳細に検討する事にしたい。以下では他の遺跡等の土層所見一般から、周溝覆土分析の一試論として検討してみよう（注4）。

●崩壊逆流入土層の解釈

崩壊逆流入土層については必ずしも方台部側からだけではなく、外周側からも流れ込んで覆土が形成されている可能性もある。即ち、少なくともある一群の周溝墓には、方台部のみならず周溝の外周にも周溝の掘削土を起源とする土盛りの施設、即ち外堤が巡らされていた事が想定され得る。

又、この土層については更に細別を行い、一定の単位を見いだす事が出来るかも知れない。方台部等の構築の際に周溝の掘削に伴い掘削した土をそのまま盛り上げているとすれば、方台部等の土層は地山の基本層序の逆となり、その周溝内への逆流入土層では更に堆積層序が逆転して基本層序に準じた堆積層序を示すものと考えられる。もしも方台部等への積み上げに際して人為的な選択が働けば、その土層からある程度の傾向を見いだす事が出来るであろう。何れにしても、崩壊逆流入土層が均一でないとすれば、そこから地上施設に関する土砂の積み方を想定する事が出来るのである。

●黒色土層の解釈

遺構の覆土一般に存在する黒色土層は周溝の覆土にも認められ、これには地山下部のローム及び礫の混入が多少見られる。これは旧表土層を起源とするものであり、当時の表土層が凹地である周溝内に流入した旧表土流入土層である。

周溝覆土の中に旧表土流入土層が形成されるにあたり、どの方向から流れ込んでいるかについては崩壊逆流入土層同様詳細に検討する必要がある。即ち、必ずしも大量に外周方向のみからの表土の流入であるとは限らず、緩やかな方台部、外周両方向からの流入と考えざるを得ない場合もあるのではないかだろうか。この場合には、周溝外周を巡る外堤の存在が予想されよう。周溝の内側には方台部の盛り土があり、外側には外堤が巡っている場合があり、何れの部分にも一次的には表土が大量に露出していない状況が考えられるからである。その上で方台部の盛り土と外堤の表面がそれ

ぞれ表土化しながら徐々に周溝内に流れ込んでいる場合も十分に想定され得る。これについては周溝内覆土に占める旧表土流入土層の位置、つまり崩壊逆流入土層との上下関係も示唆的である。

何れにしても堆積状態が良好な遺跡で、旧表土流入土層の流入方向と流入時期を詳細に検討する必要があり、その上で周溝内覆土の黒色土層形成要因の二つの可能性、

- ①外側からの表土層の流入
- ②内外両方向からの表土層の形成流入

のいずれであるかの判断をする必要がある。

ここで二番目にあげた内外両方向からの旧表土層の流入については、方形周溝墓の崩壊による形態変化に関して、構築後の一定期間崩壊が極めて少ないと、或いは方台部の形状が強く管理された安定期があり、その間に周溝墓の方台部と外堀に黒色の表土層が形成され、これが徐々に周溝内に流入したと見るべきであるかもしれない。少なくとも露出した表面が一定期間(それも比較的長期間)安定して維持されていない限り黒色の表土層は形成されないと考えるのが一般的であろう。

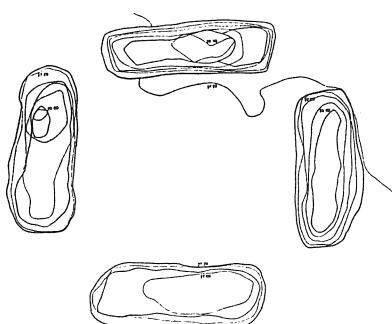
周溝墓構築時に黒色土層で覆われた当時の地表面に、黄色のローム層をむき出しにした墳丘を造営し、それでよしとしたかどうかも疑問である。三番目の可能性として方台部等の地上施設に、ある程度の黒色土層を主成分とした化粧土の張り付けが行われこれが流入した事が、或いは考えられるかも知れない。

●隣接する二基の周溝墓での状況

周溝覆土の実体的検討を補強する材料として、二基の隣接した周溝墓の覆土の検討が重要であろう。特に周溝墓の外周部分に外堀があるかどうかと言う点に関しては隣接した二基の周溝墓の覆土の観察から得られる情報は貴重である。この様な点については『中耕遺跡』の検討で幾らか明らかにする事が出来るであろう。

●四墳対囲型の土壙壁の立ち上がり

広面遺跡に於ける四墳対囲型の周溝墓の土壙壁の形態を詳細に見てみると、この特徴として、長辺については方台部に接する側は急な立ち上がりを示し、外周の側は緩やかな立ち上がりを示している。又、短辺については立ち上がりは緩斜面となっている事が一般的である。



第5図 土壙壁の立ち上がり (SZ-17)

では、外見にふさわしく具体的な掘込みを持たない四隅の部分を景観上の溝に取り込むべくこれに接した

先ず短辺の緩斜面については、先に述べた方形周溝墓への外堀の存在を想定する考え方からも一定の解釈が可能である。即ち周溝墓の溝は内側を方台部によって区切られるのみならず、外側をも外堀によって区切られているとすれば、四墳対囲型の周溝墓の四つの土壙は各々が分離した単独の掘込みではなく、実は方台部と外堀との存在によって景観上は一周する溝となるのであり、それ故に短辺側の立ち上がりは主体的な意味を持たない、むしろもたすべき

ではないと考える事が出来る。従って溝が一周する

部分の立ち上がりが緩やかに作られていると考える事が可能である。

長辺について、方台部側の立ち上がりの傾斜がきつく外周側が緩やかな事は、どの様に考えられるのだろうか。方台部側のきつい傾斜の持つ効果は、方台部を周溝から隔絶し周溝の掘込みと相俟ってその容量を多くみせる効果がある。外周側の緩やかな傾斜は、それのみでは周溝と外部を隔絶するには不十分であり、外堤の存在と相俟ってはじめて周溝墓とそれ以外の部分の区画を行う効果を発揮すると考えられよう。

3 節 覆土から推定した方台部の形態

従来注目されてこなかった視点として、周溝覆土の中でも方台部崩壊流入土層に注目してこれの形狀から、方台部の形狀を逆に推定して行く試みをあげる事が出来る。

遺跡形成時には、一般的には凸部は崩壊流出し、凹部は逆に埋没する。一定の場所を占める一遺構に於いて凸部と凹部の両者が存在すれば、凸部の崩壊流出土壌は同一遺構の凹部に流れ込んで覆土を形成するであろうし、そうであれば、同一遺構の凹部の土層は、失われた凸部分を反映する唯一の手懸りであると考えられる。

●方台部形狀の復元に向けて

周溝の中で崩壊逆流入土層がどの様な位置にどれだけ形成されているかを詳細に見る事によって、逆にその土層の供給源である方台部の形狀を想定する事が不可能ではあるまい。たとえ具体的な形狀の詳細復元までは困難であっても、ある程度の形狀は想定可能である。

例えは、方台部からの土砂の流入速度が均一であると仮定をすると、方台部の形狀が周溝の内壁に沿った形狀かそうでないか、即ち、盛り土が方形であるか、円形であるかによってこの土層の形成も替わってくるであろう。盛り土が方形であれば崩壊逆流入土層は周溝の各部分で比較的均一な流入として認められ、一方盛り土が円形であれば崩壊逆流入土層は周溝の中央部に多量に認められ、コーナー部に近づくにつれて少なくなつて行くであろう。

周溝墓の周溝覆土の観察に於いては、①方台部がどの様に構築され、②造営後のどの段階で、③どの様な要因で、④どの様な土層が形成され、⑤この時の各段階での地上施設の形狀がどの様なものであるのか、と言った点に関する注意が必要である。(未了)

(注釈)

(注 1) 現段階では中耕遺跡は未報告であるので検討から除外する。

(注 2) 本来土壙と言う名称は用途不明の掘り込みに対する呼称であるが、ここでは四壙対開型の周溝墓を構成する四つの掘り込みを便宜上土壙と呼称し、以下単に土壙と記す事にする。

(注 3) 報文『広面遺跡』の図版を用いて計測した。

(注 4) 例えは『東川端遺跡』等参照の事。